The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	富本憲吉のバーナード・リーチ観 : リーチ作《楽焼飾壺》（1914年）の評価をめぐって
Author(s)	鈴木, 禎宏
Citation	デザイン理論. 2025, 85, p. 84-85
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100286
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

富本憲吉のバーナード・リーチ観
リーチ作《楽焼飾壺》（1914 年）の評価をめぐって

鈴木　禎宏　お茶の水女子大学

はじめに　個人作家について

今日の陶芸史においてバーナード・リーチ（1887–1979）と富本憲吉（1886–1963）は，大正時代に現れた「個人作家」，すなわち個人の美意識に基づいて工芸分野で創作活動を展開した作家の嚆矢として評価されている。彼らは作品を美術館で展示したり美術画廊や百貨店で販売したりする一方，雑誌などのメディアで作陶について論じ，学校などで後進の指導にあたった。彼らは文筆活動も精力的に行ったが，彼らが自作や他の作家の作品についての論評を公表していった点には，これまで以上に注意が払われて良いように思われる。陶芸史における「個人作家」成立を考える際，リーチの自信作であり，富本も高く評価した《楽焼飾壺》（1914 年。京都国立近代美術館所蔵，所蔵品番号 Cr0872）は，「個人作家」の成立を考える上で一つの指標となりえる作品だと思われる。

リーチと富本の略歴：《楽焼飾壺》制作まで

この作品が作られるまでのリーチと富本の経歴を確認すると，リーチは 1887 年に香港で生まれ，イギリスで教育を受けた後，日本の生活と文化に興味を抱いて 1909 年に来日した。彼はやがて陶芸に惹かれるようになり，1911 年に六代乾山（尾形繁吉 1853–1923）に入門した。一方，富本憲吉は 1886 年に奈良県の安堵村に生まれ，東京美術学校で意匠を学んだ。彼はイギリスに私費留学をし，1910 年に帰国すると東京で共通の友人を通じてリーチと知り合った。リーチが陶芸を学びたいと考え師を探し始めると，富本は彼に六代乾山を紹介した。陶芸を学び始めた後，リーチはしばしば手紙で富本に質問をしたが，それに答えているうちに富本も作陶を試みるようになっていった。やがてリーチの関心は日本から中国へと移り 1915 年に北京へ移住したが，その前に彼が日本で陶芸を学んだ記念として制作したのが前述の《楽焼飾壺》である。京都国立近代美術館が所蔵するものは，富本の旧蔵品である。

富本によるリーチ作《楽焼飾壺》評価

富本はリーチの《楽焼飾壺》を高く評価し，自著でそれについて論じ，富本邸を訪れた客にそのすばらしさを語った。富本は『楽焼工程』（采文閣，1930 年）の中で，この作品の制作時期・制作地に関する重要な情報を残すばかりでなく，詳細な技術的な解説を行っている。それらを検討すると，本作が作られたのは 1914 年 9 月から翌年 1 月上旬の期間内であり，場所は旧赤坂区福吉町のリーチ宅ではないかと考えられる。さらに，素材やその適用をめぐる詳細な技術情報は，リーチがこの作品を制作する様子を傍らで富本が見ていたことを示唆している。富本は《楽焼飾壺》を高く評価するが，その根拠はリーチによる技術の用い方，あるいは工芸に対する自由闊達な制作姿勢にあると思われる。

戦後になっても富本はこの評価を維持した。1952 年に富本は『わが陶器造り』（私家版）を著し，その中で「リーチ作楽焼壺」について再び言及している。細部では富本は記憶違いをしているが，この作品を高く評価する態度は変わらない。

その一方で，リーチがその著作 *A Potter's Book*（London: Faber & Faber, 1940）に掲載した別作品に対しては，富本は厳しく批判している。これは，同じ作家（リーチ）の作品であっても，創意工夫という点で難があると思えるものには，富本が否定的だったことを示している。

《楽焼飾壺》を陶芸史に残す

1951 年になると富本は所有していた《楽焼飾壺》のために二重の共箱を作り，箱書きを行った。こうした行為は，リーチの作に歴史的な意義を認め，それを後世に伝えたいと富本が考えたことを示している。後にリーチ自身がこの箱の蓋に署名を付け加えているが，それは 1953 年の来日時（おそらく 6 月 17 日から 19 日の間）のことであろう。

結論

リーチ作《楽焼飾壺》は富本にとって作陶における理想を体現した作品であり，富本は生涯これを傍らに置いていた。その理想とは，作家の創意工夫が作品において発揮されることである。そのため，たとえ同じ作家（リーチ）の作であっても，惰性やしがらみに囚われていると思える作品を，富本は容赦なく批判した。

こうした言説をふまえると，「個人」の「美意識」の表明として陶磁器制作に関わった「個人作家」の先駆者としてリーチと富本を位置づけることは妥当であり，リーチ作《楽焼飾壺》は 1910 年代にはじまる「個人作家」の時代を語る上で指標となる作だといえよう。

主要参考文献一覧

大長智広他（編）『京都国立近代美術館所蔵品目録 XIII 工芸』京都国立近代美術館，2021 年。
式場隆三郎『バーナード・リーチ』建設社，1934 年。
鈴木禎宏「柳宗悦と富本憲吉」，『民藝』2022 年 1 月。
鈴木禎宏「バーナード・リーチ初期作品の研究：京都国立近代美術館所蔵《素焼着彩人形》について」，『京都国立近代美術館研究論集　Cross Sections』，11（2024）：54–71。
富本憲吉『楽焼工程』采文閣，1930 年。
富本憲吉『わが陶器づくり　未定稿』私家版，1952 年。
奈良県立美術館（編）『日英文化交流のかけ橋　富本憲吉とバーナード・リーチ展』奈良県立美術館，読売新聞大阪本社，美術館連絡協議会，1998 年。
Leach, Bernard. *A Potter's Book*. 2nd ed. 1945. London: Faber & Faber, 1976.